

# 生徒作品の文章表現の質を高める指導法に関する実践的研究

——高等学校における「聞き書き」作品の指導を通して——

玉木雅己

## 1 はじめに

文章表現の学習における協同的な活動は、推敲や評価を目的として記述後に行われることが一般的である。しかし、記述前・記述中の活動として組み込むことも大きな意味を持つ。学習者達が、支援的・互恵的な関係を構築することによって、教室全体で書くことに取り組む雰囲気生まれる。そのような主体的な表現活動の授業を実現するために、論者（玉木）は、数年来、実践的研究を重ねてきた。

それでは、生み出された生徒達の文章表現を、より良いものにしていくためには、どのような指導を行うことが必要なのだろうか。本稿では、この点について、聞き書きの生徒作品（論者の自主表現単元を通して作成）の分析を手がかりにして考察したい。

聞き書きは、語り手と聞き手の協同的な活動によって成立する表現学習である。学習者の文章表現能力だけでなく、聞く力と語る力を高めるために非常に効果的である。問題認識力・解決力の伸長に

も資するところが大きい。

聞き書きは、相互作用によって生み出されるがゆえに、認識主体である学習者の力量によって、文章の質が大きく左右される。とりわけ、記述前・記述中段階の問題点が顕在化しやすい。本稿では、それゆえ、聞き書き作品を文章表現の質的な改善の方策を探るための研究資料とした。

## 2 自主表現単元「人生の先輩に聞いてみよう」

本単元は、勤務校の「総合的な学習の時間」の第1学年の学習内容を補完するために設定したものである。二〇一七年度の下半期に、論者が学級担任を務めたクラスで自主的に実施した。

### （1）単元編成の理由

#### ア GAPのカリキュラムの概要

勤務校の総合的な学習の時間は、Global Action Program（以下、GAPと略記）と名付けられている。

表1 2017年度 G A Pカリキュラム (第1学年)

<b>東広島を知る</b>	<b>世界とのつながりを知る</b>
東広島市役所職員* 地元企業会社員* 地域医療専門家* N P O古民家再生・研究者*	J I C A研修生との交流* 韓国の姉妹校 (外国語学校) 生徒との交流* I D E C留学生との交流*

I D E C : 広島大学大学院国際協力研究科

<b>情報の活用方法の習得</b>	
マインドマップ* 新書購読 小論文の作成	レシテーションコンクール* 東広島の英文ガイドブック作成

\* 校外からゲストが参加した単元

表1に示したように、G A Pのカリキュラムは、生徒の視野を大きく広げる充実した学習内容を備えている。〈東広島〉〈世界〉〈情報活用〉の3領域で構成されている。各領域とも多彩な単元が設定されている。加えて、ほぼ毎月、校外からゲスト(社会人講師・留学生・姉妹校生徒等)を迎えた。

その学習目標は、次の2点にまとめられる。  
○地元地域(東広島市)の課題を解決するために、体験的な学習活動を通じて習得した知識や技能を活用し、協働して主体的に行動する態度を養う。  
○地元地域とグローバル社会との関連性を理解し、異文化間活動に対応できるコミュニケーション能力を養い、自分の言葉で発信できる能力を養う。

### イ G A Pカリキュラムの補完

1年次のG A Pは、知る活動が中心である。そのため学習目標に掲げられている、生徒が主体的に情報収集を行うことや、情報を発信することを、主目的とする単元は少ない。

表1で該当するのは、東広島ガイドブックと小論文だけである。前者は、各クラスが、夏休みの間に取材を行い、9月に英文の小冊子(10~20ページ)を編集した。後者は、2~3月に1年間のまとめの小論文「東広島の地域課題を考える」を書き上げた。

今回の自主表現単元は、1年次には不足していた活動を補完するとともに、2年次のG A Pへの橋渡しの役割を担う。2年次には、自分達でテーマを設定し、地元地域と東京でフィールドワークを行うことが、中心的な活動として計画されている。

### (2) 自主表現単元「人生の先輩に聞いてみよう」の学習内容

本単元の学習内容の概要は、表2の通りである。国語総合・H R活動の隙間時間や冬休み等を利用して、半年間をかけて実施した。

表2 自主表現単元の学習内容

次		時	実施月	学 習 活 動			
2	1						
6	5	4	3	2	1	10	小説教材を用いて聞いて書く練習を行う。
3	12	1	12	11	10	10	相互に聞き取った内容を文章にまとめる。
							聞き書きの手順・留意点を理解する。
							インタビューを実施する。
							下書きを作成する。
							改善点に注意して浄書を仕上げる。

## ア 第1次 聞いて書く学習への導入

第1次は、聞いて書く活動に取り組むための導入学習である。生徒達は、このような学習活動に、今回初めて本格的に取り組んだ。

第1次・第1時では、教材本文を手がかりにして、ペアで語り合ったことをまとめる練習を行った。続く、第2時は、聞き書きの前段階の練習として、ペアの相手が語る言葉を素材として文章化した。

第1時は、村上春樹の『フルウェイの森』（一部）と『夜中の汽笛』について、あるいは物語の効用について（以下『夜中』と略記）を投げ入れ教材として使用した。本時の授業は、両教材の個性的な比喩を用いた愛情表現に着目して、学習課題①～⑤を設定した。<sup>1)</sup>『フルウェイの森』では、①次の〈僕〉と〈緑〉の会話の空欄部分に入る表現を考えた。①では、お互いが相手の言葉をメモした。

「君が大好きだよ、ミドリ」

「どれくらい好き？」

「春の熊くらい好きだよ」

「春の熊？」と緑がまた顔を上げた。

「それ何よ、春の熊って？」

「野原を君が一人で歩いているとね、

そういうのって素敵だろ？」

「すごく素敵」

「それくらい君のことが好きだ」

『夜中』は、全文で二二〇〇字程度の掌編である。作品冒頭で、少女は「あなたはどれくらい私のこと好き？」と、少年に質問する。少年は「夜中の汽笛くらい」と答え、その理由を説明する。作品は「今度は少女が自分の物語を語り始める。」という一文で結ばれる。

『夜中』については、次の学習課題②～⑤を設定した。

②「夜中の汽笛くらい」と答えた少年は、少女をどれくらい好きなのか。②は、作品の冒頭部分だけを読んで予想する。）

③少年にとって、少女はどのような存在なのか。

④少女は、どのような毎日を過ごしているのか。

⑤少女が語る「物語」について、書き出し（二〇〇くらい、あなたが好き」という形式で）と、あらすじを考える。

②でも、相手の考えをメモした。その後で、ペアで教材の音読を行い、本文を根拠にして自分達の予想を確かめた。

『夜中』には、③～⑤の明確な根拠になる記述は、ほとんど認められない。本文中の少女の描写と少年の言葉から、2人で考えた内容を文章にまとめた。

第1次・第2時では、ペアの相手から、感謝する人物への思いを聞き取って文章化した。書かれた文章を、語り手自身が読み、自分の経験・考えを再整理し浄書を完成した。論者は、「ありがとう」と題した、この表現活動を数年間実践している。今回も、聞いて書く学習の入門編として、生徒達は前向きに活動に取り組んだ。

## イ 第2次 聞き書きの作成

高校1年生の後半は、自分の進路について真剣に考え始めること

を、教員や保護者から求められる時期である。今回の聞き書きは、進路選択のための手作りの参考資料として、生徒達が活用できるように、次のような柱立てとした。

・ 高校生活の様子  
〔後掲の質問項目①〕

・ 進路選択の方法  
〔②・③〕

・ 仕事の内容・苦勞・やりがい  
〔④～⑩〕

・ 進路選択に関するアドバイス  
〔⑪〕

第2次・第3時では、作成の手順・留意点を確認した。さらに、一人語りの参考作品2編の読み合わせを行った。自分の作品作りを活かせるように、文体・内容・構成に関する気付きを共有した。

第2次・第4～5時は、冬休みの課題として実施した。

語り手への質問は、本来は生徒自身が考えるべきである。しかし、冬休み前には、それを創出する授業を設定できなかった。それゆえ、論者が後掲の質問項目を明記したワークシートを準備した。生徒達には、必要に応じて補足的な質問を追加するよう指示した。生徒達

① 取材対象の名前・年齢・職業・自分との関係等の記入欄

② どんな高校3年間でしたか。

一番印象に残っていることは何ですか。

③ 高校に入った時は、卒業後の進路(進学・就職・分野等)について、どんな風に考えていましたか。

④ 高校卒業後の進路をはっきりと決めたのは、何年生の頃でしたか。どんな風に決めましたか。誰かに相談しましたか。

⑤ 今の仕事を始めて何年たちますか。

⑥ 今の仕事に就く前に、何か別の仕事をされていましたか。

⑦ 今の仕事に就くことに決めたのは、いつですか。

どんな理由から決めましたか。

⑧ 仕事の内容を詳しく教えてください。

⑨ 仕事で苦勞されているのは、どういう点ですか。

⑩ 仕事でうれしさや喜びを感じるのは、どんな時ですか。

⑪ 仕事で一番大切にしているのは、どんなことですか。

⑫ 高校一年生の私が進路を決めるために、アドバイスをお願いします。

当初は、浄書に向けて、1月後半～2月前半に、下書きの読み合わせを計画していた。しかし、様々な事情(学校行事・入試等)による臨時時間割による授業の実施、インフルエンザの流行等)によって、残念ながらその時間を確保できなかった。

その代わりとして、論者が、ワークシートと下書きを読み、浄書のためのアドバイスを行った。

共通的な改善点については、学習資料を配布して説明した。

個別的なアドバイスは、付箋紙(50×50mm)2枚程度にまとめて、ワークシートに貼付して返却した。評価できる点と、説明を加えて欲しい点を、具体的に指摘した。下書きの文章は、書き換えの余地を大きく残している。そのため細かく字句を添削することは避けた。生徒達は、家庭学習として、下書きやワークシートに必要な情報を加筆した。可能な生徒は追加のインタビューを行った。

第6時は、各自で準備した補足資料を持参して、教室で浄書を仕上げた。浄書の原本は、本人がGAP用のファイルに綴じて、2学年以降も活用できるようにした。論者は、写しを保管した。

### 3 生徒の聞き書き作品の分析

今回の生徒作品には、語り手の生き方を反映した興味深い内容が含まれている。語り手は、約90%が生徒の家族・親族だった。どの語り手も、問いかげに真摯な態度で応えてくれている。各作品からは、語り手の親愛的な思いが、よく伝わってきた。

ただ、出来上がった作品には、せっかくの語り手の思いを十分に活かし切れていない面があるのも事実である。聞き手の成長によって、さらに充実した内容の文章になる可能性が大いに感じられる。

ここでは、記述前、記述中それぞれの段階で明らかになった課題について述べたい。

#### (1) 記述前段階(メモの指導)の課題

『聞き書き』の力―表現指導の理論と実践』は、聞き書きの指導に関する基本文献である。同書は、原稿の長さについて、次のように述べている。<sup>②</sup>

原稿の長さは、基本的には自由とします。長さを指定するとそれに合わせて書くようになります。今回の指導のポイントの一つは、「具体的に詳しく聞いて書く」です。できるだけ長く書くように指導します。指定する場合は長めに指定します。例えば三〇〇〇字〜六〇〇〇字程度をめやすとします。

本単元では、一六〇〇字詰(片面八〇〇字) 原稿用紙を使用した。

ほとんどの生徒は、その1枚分を目安として取り組んでいた。

そのため、今回の平均値は、下書きは八〇〇〜一〇〇〇字、淨書でも一二〇〇〜一五〇〇字だった。下書きから淨書にかけて増えたとはいえ、前掲書の目標値に比べるとかなり短い。

生徒作品には、内容的なまとまりがあるものは多かったが、十分に話を聞くことができていないと感じさせるものは稀だった。

ワークシートのメモは、断片的で簡略なものが大半だった。GAPで外部講師の話を聞いた時のメモや、1年間に数回取り組んだマインドマップ等と比較しても貧弱である。

下書きを作成する際に、生徒達は、かなりの情報を書き足したわけである。そのような増補が可能であったのなら、メモの段階から、もう少し材料を豊富に用意することもできたはずである。

この点に関しては、論者の指導に反省すべき点がある。第2次・第3時での留意点の説明の際に、分量の目安(今回の原稿用紙2〜3枚を埋められる材料を集める等)を確認するとともに、大量に記入できる取材用紙を準備しておくべきだった。

ところで、ワークシートの分析からは、分量の少なさ以外にも問題点が指摘できる。それは、次のような文章の核になりそうなメモが、下書き段階で見落とされている例が少なくないという点である。

⑦きびしいだけでもやさしいだけでもだめ。

⑧子どもが分からなかった所が分かるようになって、表情が明るくなった時

⑨名前を完全に覚えること。いつも冷静でいること。どんな人にも同じ対応にすること。

これらのメモは、語り手の仕事観を掘り下げたり、話題を広げるための起点になる可能性を感じさせる。

⑦と⑧は、ピアノ教師の言葉である。

⑦は簡潔な言葉である。それだけに、語り手の指導理念、指導方法の工夫、生徒との関係の作り方、このように考えるようになったきっかけ等、語り手から色々な補足説明を引き出す必要がある。

⑧については、ピアノで「分かる」とは、どういう状態を意味するのだろうか。また、子どもたちの表情の変化に何時気付けるようになったのか。これらについても裏付けになる経験談を聞き出したい。

⑨は、看護師の言葉である。なぜこの3点なのか。どんな経験を積み重ねて、この心がけの言葉を獲得するに至ったのか。時間が経つにつれて常年实现できるようになったのかどうか。重ねて尋ねてみたい質問が、いくつも浮かぶ。

聞く力を鍛えるためには、文章化を急ぐのではなく、各自のメモの内容・価値の吟味や、その活用法の検討等について、記述前段階で学習内容化することが必要であった。

## (2) 記述中段階(記述内容)の課題

### ア 一般論を支える具体性の増補

生徒の聞き書きには、浄書の段階でも、聞き取った言葉の価値を書き手が十分に理解できていないのではないかと感じる作品が多い仕事に関連する質問項目(⑦内容説明、⑧・⑨苦労や喜び、⑩大切にしていること)には、特にそれが目立つ。語り手は、自分の仕事の転機となった出来事についても、しばしば話題にしている。それ

に対する生徒達のとらえ方も、おおむね淡泊である。

逆に言えば、質の高い聞き書きを生み出すためには、自分がかつきりと理解できていない点は、実感が湧くまで丹念に質問し続けることが不可欠だということである。

次の[A]は、大学職員の聞き書きの一部である。引用より前の部分では、子供の頃から打ち込んだスポーツが、高校・大学・就職に至る進路を決定する要因となったことが、活き活きとユーモラスに語られている。次に引用するのは、就職後に関する部分である。

[A] 就職後は色々な分野の仕事をしたよ。この中でも一番長かったのは「学生就職」。簡単に言えば、大学生の就職の手伝いだ。就職は受験とはわけが違うからね。何十社も落ちる人だっ出てくるし、学生が希望している企業へ入れないことだってある。ここで一つ、私の印象が一番残っている学生の話しようか。彼は、大学の成績が優秀だったんだ。それなのに、何十社も落ちてね……。

当時の私は、それはもう頑張った。県外の企業にまで足を運んで、彼を売り込み、手紙を出し。彼自身にも、スーツの選び方、着方、髪型について指導した。髪については一緒に床屋まで行ったよ……。

そのかいあってか、彼は大手企業に入社したから、私の努力も、彼の努力も報われたというものだ。今では良い思い出だ。

ここまで書いたら、もう書くこともない気がするが……。  
ああ、そうだ方針。

私がこの仕事をするうえで掲げている方針は、「本人を否定しない」ことと、「その子に合った企業を探してあげる」こと。人ひとりの人生がかかっているからね。私も本気で取り組むよ。

[A]は、就職支援に関する印象的なエピソードを聞き取っている。語り手が、学生を一生懸命にサポートしたことが理解できる。とはいえ、ここに語られているのは並大抵の出来事ではない。神経を磨り減らすような苦労や、爆発的な喜びがあったはずである。しかし、書き手の説明は、やや表面的である。

前半部の語り手と学生との二人三脚については、失敗と成功の理由の分析、二人がこの経験を通して得たこと等を書き加えたい。服装や髪型をどう指導したのか、その中身も詳しく知りたい。

また、後半部では、2つの方針について、「一番印象に残っている学生」の場合は、このようだったという補足的な説明があれば、語り手の言葉は、より説得力を持つはずである。

もちろん、具体的に詳しくと言っても、単に長く書けば良いというわけではない。次の[B]は、製造業の語り手が語る苦労談である。

[B] 私が仕事で苦労していることと言えば、出荷の納期に間に合うように機械を製造すること、また、お客さんからのクレームがこないような高品質なものを作るためにミスなく作業することです。

人間、必ずミスはしてしまいます。けど、大事なはそのミスをいかに少なくするかということです。

例えば、機械は図面の手順書を参考にしながら組み立てていくんですけど、この図面もやっぱり完璧ではないんです。同じ図面を見てやっても捉え方も一人一人違うわけだし。だから、皆で図面の改訂をしたり、要望を出したりすることで、資料を作り直していったって誰が見て作っても、同じ高いクオリティが出るようにしているんです。

[B]は、ミスを少なくすることが大事だという一般論で終わっていない。語り手は、改善の手立てについて、図面の解釈によるズレという点から説明する。これは当事者ならではの発言である。分量は短いですが、専門家にしか語れない内容を備えている。[A]に補いたいのは、このような意味での具体的な言葉である。

#### イ 共通的な言説を超える独自性

生徒達の聞き書きには、特定の話題に対する共通的な言説が認められる。最も多いのは、⑨仕事の喜びは、「ありがとう」という感謝の言葉を言われた時だという答である(11/38人)。

もう一つ目立つのは、⑧仕事の苦労や、⑩仕事で一番大切にしていることとして、人間関係を取り上げるものである。大半の作品が、何らかの形で言及している。

社会生活での人間関係の重要性は言うまでもない。しかし、生徒の作品では、「自分より年上の人だけでなく年下の人にも敬意をもって接するようにしています。こういう思いやりや考え方が、円滑な人間関係をつくり、雰囲気の良い職場にもつながっていくのだと思

います」等の一般的な心がけの表明で終わっていることが多い。

では、人間関係について、その人でなければ語ることができない内容とは、どのようなものなのだろうか。二つの事例を見てみたい。先ず、**C**は、世代間のギャップに対する苦労を述べたものである。

**C** 仕事よりも今ははるかに面倒なことがある。それが、最近の悩みと直結するのは残念だけでも。

何か？ それは若い社員とのコミュニケーションだよ。35年同じ仕事だから、外の世界っていうのか、時代の流れののってやらなくていいから、最近まで気付かなかったけど、やっぱり時代にはついて行かないといけないんだなあ、と痛感する。

事務業だから、電話とかでコミ力は鍛えられてる。けど、会社は学校とは別物で、上も下も年齢層は本当にバラバラで、話についていけないんだよね。

人一人とつたって性格は違うし、好きなことや嫌なことはバラバラそこまではまあ分かる。

けど、年齢差が20以上年下だったりとすると、日常での認識の違いや言葉やら、本当に分からない。それに加えて、性格やら何やら考えるとなると、頭が痛いね。

**C**は、実感的な言葉で悩みを語る。読み手の共感を生むのは、語り手が考えたことや感じたことが、正直に語られているからだろう。聞き書きでは、道徳的な解決策を無理に述べる必要は無いだろう。

次の**D**では、人間関係の話題から出発して、語り手の理想や願

いが語られていく。

**D** 日本企業の技術力がトップレベルぐらいだったっていうのがあるせいなのか、常に新しい技術ができてしまっただよ。

そこまでは良いんだが、僕たちはそれを理解して、他社にも負けないくらいにならないといけないんだ。だけでもそれが苦で仕方がないんだよなあ。

でもね、そういう問題にぶつかった時、それを職場の友達と協力して解決したとき、そこで得られるよろこびや達成感等を味わうことができて次も乗り越えようと思えてくるんだよ。

僕は、その仲間たちと協力するためにも職場でのコミュニケーションを大事にしているよ。やっぱり、自分が考えていることや相手が考えていることって、だいたい違っていてそれを交流し合うことで、お互いの穴を埋めることができるんだ。そこでようやく良い研究つてやつができるんだ。

だから、僕は子どもたちにコミュニケーションを通じて、まずは自分の得意なことを見極めて、そしてその自分の得意なことをどんどん追求していく。その後に相手が得意なこと自分が得意なことを理解し合つて、協力していく。僕はそのことを将来日本を担っていく子ども達に伝えていきたいですね。

**D**の語る内容は、それほど個性的ではないかもしれない。だが、語り手の未来に対する理想的な思いはよく伝わってくる。語り手が本当に語りたいた胸に秘めていることに気付く感性を働かせたい。



### (3) 考察のまとめ

本章では、聞き書きの生徒作品の分析を行った。現時点では、ワークシートの質問を順番にこなして書いたという段階に止まる作品が多かった。返ってきた言葉に反応して、さらに別の問いかけを行うということは、十分にはできていなかった。生徒達は、双方向的ではなく、一方的な質問態度で聞き書きを行っていたと言えよう。質の高い聞き書きを生み出すためには、3章(2)で検討した通り、次の2点を書き加えることを契機とすべきだと考えられる。

○一般論・抽象論を支える具体例や細部の描写

○語り手が聞いて欲しいと願っていたこと

当然のことながら、これらを書き加えるためには、確実に聞き取ることが不可欠である。予定調和的な質問態度に止まらず、創造的な広がりを持つ質問ができる聞き手に成長する必要がある。

具体的には、一問一答式のやりとりを卒業して、「相手の答えに応じて、臨機応変に二次的、三次的な質問を重ねる(『それはなぜですか』『その時どのように感じられましたか?』等<sup>③</sup>)」という探究的な問いかけができるように成長しなければならぬ。あわせて、その人が本当に語りたいことは何なのかを的確に把握する感性も必要になる。

教室での学習活動を通して、このような資質を獲得していくためには、次のような協同的・支援的な活動に授業に取り入れたい。

まず、記述前段階の学習では、メモの一つ一つの言葉について、どのような意味・背景を持つものか、また、どのような表現法を用いて文章化すべきなのか等について、ペアやグループで吟味するこ

とが考えられる。3章(1)で見たように、生徒達のワークシートには、文章が豊かに広がっていく可能性を秘めたメモが活用されていない事例が散見された。

そのような活動に加えて、別の生徒が、聞き手のメモを使って下書きを作成することも試みたい。この代理作業的な表現活動は、書き手自身が、自分のメモや文章構想を客観的に見つめ直すことにつながる。先に2章(1)Aでも述べたように、この活動の有効性については、論者は、すでに何度も実践的な検証を行っている。

次に、記述後段階の学習では、完成作品を交換して音読することや、批評メモを作成することが想定される。

作品の音読は、聞き書きに限らず、推敲作業のためには非常に効果的な方法である。音読は、黙読で確認する以上に、書き手の意図とは異なる点が鮮明になる。語り手の思いや口調がよく感じられる点、逆に読みながら気になった点、分かりにくかった点等を明らかにして、文章表現の改善につなげたい。

批評メモについては、作品の問題点の解明ではなく、改善案の提案に力点を置きたい。語り手の意図と改善案を比較しながら、書き手自身がもう一度自らの表現を見直すことを実現したい。

## 4 おわりに

本稿は、生徒作品の文章の質を高める指導の在り方について、聞き書き作品の分析を通して検討した。その結論として、生徒達が、「いま自分が立っているところが、『部分』であり、その外に語られ

ない全体がある<sup>(1)</sup>」というような問題意識を持った取材者・表現者として、文章表現に取り組むことが重要だということを確認した。このような問題意識は、自己内対話や各種資料を素材とする文章に關しても重要であることは言うまでもないだろう。

次期の学習指導要領では、「主体的で対話的で深い学び」という授業の目指す方向が提示されている。

このうち、「深い学び」については、混沌とした状況の中にある問題に気づく感性と、それを探究・解明する能力によって実現するのではないかと考える。これらは、疑問点に対して、「たとえば・それはどうしたこと×(なぜ)×(何を感じたか・何を考えたか)」と、重層的に問いかけ続けることによって養われるはずである。

複雑で文脈が見えにくい状況を整理した上で、そこに潜む問題を追究する。このような感性や能力を養うためには、聞き書きは、非常に有効な学習活動である。高校3年間の文章表現教育のカリキュラムの中で確実に位置付けたいものである。

しかしながら、これらの育成を、聞き書きのような特設的な活動だけに頼るのは限界がある。2年次のGAPでは、約50グループに分かれてフィールドワークを実施した。訪問先の調査・質問項目の作成等は、時間をかけて行うことができた。ただ、本単元とは異なり、初対面の人物に、限られた時間で、数名が一緒に話を聞くという厳しい制約の下で実施された。社会人に多するインタビューを、何とか実現できたというグループが大半だった。貴重な経験にはなったものの、認識主体として成長する機会にできたとは言いがたい。この点に関しては、教室での学習活動を、実の場に近付けていく

ことが、一番の解決策になると考えられる。先に述べた探究的な能力や感性は、日常の国語科の授業において、協同的・対話的な学習活動を充実させることによってこそ育成していききたい。そのために、今回の自主表現単元の第1次で実施した学習活動(お互いの考えを丁寧に聞き合いながら、読むことや書くことの学習を進める)に日常的に取り組むことが重要になる。今後実践的研究を重ねたい。

## 注

(1) 第1次・第1時の教材研究・授業構想には、波瀬蘭(2001)「『夜中の汽笛について』、あるいは物語の効用について」あるいは比喩の効用について、『村上春樹超短編小説案内』学研4349を参考にした。なお、空欄部分には次の表現が入る。

「向こうからピロッドみたいな毛なみの目のくりっとした可愛い子熊がやってくるんだ。そして君にこう言うんだよ。『今日は、お嬢さん、僕と一緒に転がりっこしませんか』って言うんだよ。そして君と子熊で抱き合ってクローバーの茂った丘の斜面をころころと転がって一日中遊ぶんだ。」

(2) 中井浩一・古宇田栄子編著(2016) 大修館書店108

(3) 上野千鶴子(2018)『情報生産者になる』(ちくま新書) 筑摩書房185

(4) 山田ズーニー『大人の小論文教室』Lesson799 [www.1101.com/essay/2016-10-12.html](http://www.1101.com/essay/2016-10-12.html)

(広島県立賀茂高等学校全日制)